

十分間のお茶会

チャイムが鳴った。同時に、ペンを投げ出して、答案用紙を前の席の人に渡す光景が広がった。やっと、一科目が終わった。私にとって、地獄の六十分間である。お腹に入れていた力をふっと抜いた。でも、まだ微妙にお腹の筋肉がこわばっていることが分かった。次の科目まで、あと十分。私は、藁にも縋る思いで、教室を駆け出した。

保健室に入ると、不思議な甘い匂いが漂った。

「あれ、いらっしやい」

先生は、眼鏡を外すと、読みかけの本を脇に置いた。

「テストは？」

先生は、柔らかな表情で何気なく聞いた。

「先生。あの、私、それどころじゃないんです」

「どうしたの」

「あの、お腹の音が鳴るのが怖くて、鳴らないように腹筋に力を入れて、それでも気になって。テストどころじゃないんです。何か、食べ物ももらえませんか？ほんの少しでも口にできたら、お腹、気にならなくなると思うんです」

おでこか汗ばんでいくのを感じた。でも、あの地獄のような六十分をもう一度耐えなければならぬと思うと、気の遠くなるような思いがした。私は、どうにか、先生に助けてほしかった。

「まあまあ、そこに突っ立ってないで、座りなさい」

先生の声は穏やかだった。私は、きまりが悪かったので、黒いソファに沈むように座った。黙って俯いていると、こぼこぼこぼ、と音の粒が弾けた。先生は、マグカップにお湯を入れていた。

「はい、これ」

先生は、私の前にカラフルなマグカップを置いた。

「これは？」

「これは、お茶。魔法のお茶。あなたのお腹は、鳴らない」

マグカップを手に取ると、果実の匂いがじゅわつと舞った。いつも保健室で匂う、あの不思議な香りだった。

「でも、どうして、お腹が鳴ることが気になっちゃうのかな。鳴っても、誰もあなたを責めたり、見下したり、罵るなんてことはないよ」

温かい液体が、香りを運びながら喉の奥を滑っていった。マグカップを持つ手が、少し震えた。

「なんか、静かな教室の中で私のお腹が鳴ると、自己主張しているみたいじゃないですか。私はここにいてよって。みんなテストと向き合っている中、私の存在が突然音になって飛び

出してくるのが、恥ずかしいんです。私は、できる限り、自分を消したい」 先生は、黙ってこちらを見ていた。

「静かな教室の中で、あなたのお腹が鳴ることが、自己主張しているみたいで嫌、ということ？」

「そうです。嫌です。私もみんなと同じ方向を見て、テストに集中して、普通になりたいんです。でも、お腹が鳴るから。お腹が鳴ると、私だけ教室から浮くんです」

「どうして、自己主張しちゃいけないの？」 私は、言葉に詰まった。

「お腹が空いたら、お腹が鳴る。それは、変なことじゃないのよ。身体は、そうやって自分の意見を伝えている。なのに、なぜあなたは、自己主張したらいけないの？」

「自己主張したくないって、そんなに変なことですか？」

今度は、先生が言葉に詰まった。私の声が、保健室の空間を飛び回る。

「自分の意見を言いなさいとか、よく世の中では言われるけど、言いたくない人だっていてもいいんじゃないですか？ 声とか出さずに、空気みたいに生きていたほうが楽な人もいます。その何がおかしいんですか？」 先生は、微笑むと、一言だけ呟いた。

「そろそろ、チャイムが鳴るわよ。いってらっしゃい」

やけに喉が渇く。生温い紅茶を飲み干すと、お腹が満たされていることに気づいた。